

電気通信事業用無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 雨山南古墳群

## ～3号墳・13号墳～

高松平野南部における終末期群集墳の調査

2005年8月

高松市教育委員会  
四電エンジニアリング株式会社

## 例　　言

- 1 本報告書は、四電エンジニアリング株式会社が計画した電気通信事業用無線基地局建設に伴う発掘調査報告書で、高松市三谷町に所在する雨山南3号墳（あめやまみみなみ3ごうふん）と13号墳（13ごうふん）の報告を収録した。
- 2 発掘調査地ならびに調査期間は次のとおりである。

調査地：高松市三谷町4850番地11  
発掘調査：平成17年6月6日～平成17年6月10日  
整理作業：平成17年6月13日～平成17年6月23日
- 3 発掘調査及び整理作業は高松市教育委員会が担当し、発掘調査費用および整理作業費用は四電エンジニアリング株式会社が負担した。
- 4 発掘調査および整理作業は、高松市教育委員会文化部文化振興課 文化財専門員 川畠聰が担当し、讃岐文化遺産研究会 末光甲正がこれを補佐した。
- 5 本報告書の執筆・編集は、川畠が行った。
- 6 発掘調査から整理作業、報告書執筆を行うにあたって、下記の関係諸機関ならびに方々から御教示を得た。記して厚く謝意を表すものである。（五十音順、敬称略）

香川県教育委員会 松本和彦 松本久雄 渡部明夫
- 7 挿図として、国土地理院発行2万5千分の1地形図「高松南部」および高松市都市計画図2千5百分の1「仏生山2」を一部改変して使用した。
- 8 本報告の高度値は海拔高を表し、方位は第3・11図が座標北を、それ以外は磁北を示す。
- 9 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。なお、第12・14・15図掲載の遺物は末光の表探によるものである。

## 目　　次

第1章 調査に至る経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	2
第2節 調査と整理作業の経過	2
第2章 地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	
第1節 調査の方法	6
第2節 調査地の概要と基本層序	6
第3節 3号墳の調査	6
第4節 13号墳の調査	12
第4章 まとめ	
第1節 旧石器の評価	13
第2節 雨山南3・13号墳について	13
第3節 雨山南古墳群について	13
第4節 雨山南古墳群と周辺の古墳群について	16

# 第1章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

四電エンジニアリング株式会社が計画する電気通信事業用無線基地局建設工事に関し、予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会があった。高松市教育委員会では、工事予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である雨山南古墳群にあたることから、四電エンジニアリング株式会社とともに現地確認を行い、工事予定地内に雨山南3・4号墳が含まれることを確認した。ただし、雨山南3号墳については、墳丘が不明瞭であり埋蔵文化財包蔵地とするには疑義があることから、高松市教育委員会と四電エンジニアリング株式会社で協議を行い、雨山南3号墳については試掘調査を実施することで合意した。

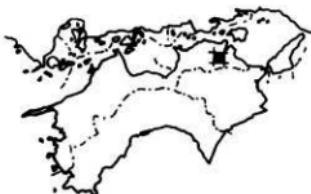
試掘調査を、平成17年2月22～24日にかけて、墳丘想定範囲に対し十字にトレンチを配置して実施した結果、墳丘を取り巻く周溝と、墳丘中央部では墓壙と石室石材を確認した。また、周辺における分布調査および地形測量(第2図)の結果、従来知られていた雨山南1～5号墳以外に、新たに7基の古墳を確認し6～12号墳と呼称することとした。このため、高松市教育委員会は、平成17年2月28日に香川県教育委員会に対し試掘調査結果を送付するとともに、四電エンジニアリング株式会社と再度協議を実施し、雨山南4号墳については工事予定地から除外して現状保存を図り、残りが悪い雨山南3号墳については工事予定地に含めることで合意し、平成17年5月16日に四電エンジニアリング株式会社から提出された埋蔵文化財発掘の届出(文化財保護法第93条第1項)を進達した。平成17年5月17日付けで香川県教育委員会より周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について、発掘調査実施の旨の回答が高松市教育委員会にあり、四電エンジニアリング株式会社へ伝達した。

これを受け、高松市教育委員会は四電エンジニアリング株式会社と協議を行い、雨山南3号墳について工事着手前に記録保存を目的とした発掘調査を実施することで合意し、平成17年6月1日に埋蔵文化財調査協定書を締結した。業務名は「電気通信事業用無線基地局建設に伴う埋蔵文化財調査管理業務」とし、高松市教育委員会は発掘調査・整理作業の実務を行い、その費用負担および契約・支払事務については四電エンジニアリング株式会社が行うこととした。

## 第2節 調査と整理作業の経過

発掘調査は平成17年6月6日から開始した。調査開始直後において、伐採後の地形観察を行ったところ、3号墳周溝より南東に約4m離れた地点において新規の古墳(13号墳)を見出した。13号墳の取扱について高松市教育委員会と四電エンジニアリング株式会社で協議を実施した結果、工事範囲に含まれることから3号墳と合わせて調査を実施することになった。幸いにも好天に恵まれ、平成17年6月10日に全体の調査が終了した。調査面積は、3号墳が約58m<sup>2</sup>、13号墳が約22m<sup>2</sup>で、合わせて約80m<sup>2</sup>となった。

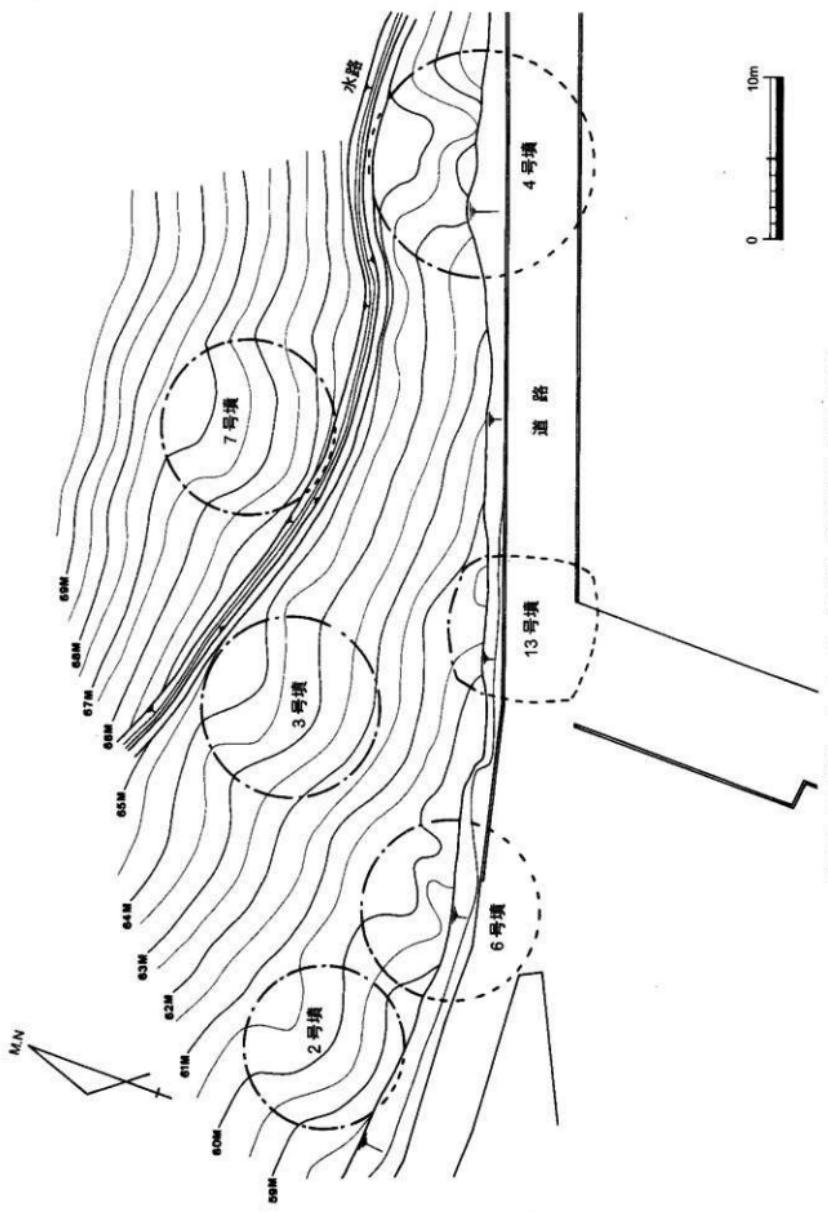
整理作業は発掘後の平成17年6月13日から実施し、6月23日に整理作業は終了した。その後、報告書執筆を行った。



第1図 遺跡位置図

0 10m

第2図 雨山南2~4・6・7・13号墳 地形測量図 (縮尺1/300)



## 第2章 地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に、低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地、東側が立石山山地によって取り囲まれた東西20km、南北16kmの範囲に及んでいる。さらに、この平野は、讃岐山脈から流下し、北へ流れ瀬戸内海へ注ぐ香川川をはじめ本津川・春日川・新川などによって形成された扇状地である。

さて、このうち春日川の支流である古川は、高松平野の南に立ち並ぶ実相寺山、日妻山、日山周辺の溜池を水源としている。中でも、東西に小日山と雨山を従えた日山は、円錐形の山容をなすコニーデに近いが、火山による溶岩を山頂部に冠したビュート地形である。本古墳は、雨山の南斜面に所在している。

### 第2節 歴史的環境

周辺で最古の遺跡は、本古墳群に隣接する雨山南遺跡で、旧石器時代後期に属する。瀬戸内技法による翼状剥片やチップ等の石器製作を示す資料が多量に出土している。

縄文時代の遺跡は明確でなく、三谷三郎池等において石器が表採されているのにとどまる。

弥生時代の遺跡でもっとも古いのは、北野遺跡と光寿寺山遺跡である。北野遺跡では、旧河道縁辺と微高地上で前期末の土坑・溝等が、光寿寺山遺跡では小丘陵域より前期末の土器包含層が確認されている。中期末から後期初頭に属する中山田遺跡は、丘陵上に位置する高地性集落で、焼失した痕跡を残す竪穴住居跡や倉庫跡などが検出されるとともに、分銅形土製品が出土している。通谷遺跡では、中期末の土器が出土するとともに、後期後半の土器棺墓が7基確認されている。弥生後期後半～古墳前期になると、上林遺跡、北野遺跡、錦野西遺跡、三谷中原遺跡と遺跡数が増加している。

次の古墳時代では、集落跡は不明だが、古墳が數多く確認されている。前期に属する小日山1号墳は、日山から派生する丘陵底部に立地し、全長約31mを測る前方後円墳で、塊石積みの堅穴式石室が露出している。この1号墳の東側丘陵底部にある小日山2号墳は、直径約16mを測る円墳で、同じ前期に属する可能性がある。中期初頭に属する三谷石舟古墳は、全長88mの大きな前方後円墳で、高松平野南部における盟主墳である。剣拔式石棺が後円部に露出している。次いで盟主墳として築造されたのが、削平された高野丸山古墳である。直径約42mを測る大型円墳で、幅10～15mの周濠が巡っている。なお、三谷石舟池1号墳も、堅穴式石室をもつ古墳で、中期に属すると推定される。また、高野南1号墳からは、中期末の円筒埴輪片が採集されている。平石上1号墳も、内部主体は不明だが、後期前半に属する可能性がある。後期後半以降になると、この地域においても横穴式石室を主体部にもつ古墳が多く築造されるようになる。最大規模の横穴式石室をもつものは欠野面古墳で、全長9.1mの両袖式である。調査された古墳では、中山田3・4号墳、三谷石舟池2～12号墳、平石上2・3号墳、万塚古墳があるが、どの古墳も基底石付近しか残っていないかった。なお、未調査だが上佐山東麓古墳では石室が開口しており、加摩羅神社古墳では巨石が散乱している。今回報告する雨山南古墳群や周辺に分布する北山古墳群と住蓮寺池古墳群も、同じ後期後半～終末期に属する群集墳である。ほかに、光寿寺山東・西古墳があるが、時期・内容とともに実態はよく分かっていない。古墳以外では、古墳時代中期に操業していた二谷三郎池西岸窯跡の初期須恵器窯が有名である。

飛鳥～奈良時代になると、この地域において古代の官道である南海道が通っており、駅の一つ「三輪駅」が設置されたと推定されている。本市教委の調査でも、時期不明だが道路状構造を確認している。時間が下って三谷中原遺跡では、平安時代に属する南海道や条里地割に関する溝が確認されている。高野庵寺では、転用された礎石が残されており、奈良～平安時代の軒瓦が出土している。

鎌倉～室町時代といった中世では、上林遺跡で掘立柱建物跡や溝が検出されている。光寿寺山遺跡は、室町時代に光寿寺が建っていたと伝えられており、室町時代頃の遺物が表採されている。室町時

代から始まる戦国期の動乱によって、この地域でも数多くの城館が造られている。三谷氏の上佐山城跡・三谷城跡、鎌野氏の鎌野城跡、由良氏の由良山城跡などがある。しかしながら、土佐長宗我部氏の讃岐侵攻や豊臣秀吉の四国平定により、各氏族はその勢力を失い、城館も廃絶している。

江戸時代では、この地域は、生駒家4代による讃岐一国支配の後、松平家11代による高松藩領となり、明治維新を迎えるのである。



- |                |                 |                     |             |              |
|----------------|-----------------|---------------------|-------------|--------------|
| 1 上林遺跡         | 2 北野遺跡          | 3 鎌野西遺跡             | 4 三谷中原遺跡    | 5 由良山城跡      |
| 6 推定南海道        | 7 加摩羅神社古墳       | 8 鎌野城跡              | 9 高野丸山古墳    | 10 高野鷹寺      |
| 11 高野南1号墳      | 12 高野南2号墳       | 13 石舟池古墳群           | 14 三谷石舟古墳   | 15 三谷城跡      |
| 16 三谷三郎池遺跡     | 17 三郎池西岸窯跡      | 18 平石上1号墳           | 19 平石上2~6号墳 | 20 日山山頂古墳・経塚 |
| 21 小日山1号墳      | 22 小日山2号墳       | 23 矢野面古墳            | 24 犬の馬場古墳   | 25 北山古墳群     |
| 26 雨山南古墳群      | 27 雨山南遺跡        | 28 住蓮寺池1・2号墳        | 29 万翠古墳     |              |
| 30 日妻山古墳・経塚    | 31 通谷遺跡         | 32 光尊寺山遺跡・光尊寺山東・西古墳 | 33 上佐東山麗古墳  |              |
| 34 池田合子神社御旅所古墳 | 35 上佐山城跡(王佐山城跡) | 36 中山田遺跡・中山田3・4号墳   |             |              |

第3図 周辺主要遺跡位置図 (縮尺 1/25,000)

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の方法

調査地は、電気通信事業用無線基地局建設予定地のうち、3号墳が北西隅に、13号墳が南端に位置する（第4図）。3号墳の調査区は、東西約13m、南北約9mの不整な三角形状を呈し、面積は約58m<sup>2</sup>になった。13号墳の調査区は、東西約11m、南北約2mの不整な四角形状を呈し、面積は約22m<sup>2</sup>になった。調査の方法は、最初に地表面まで重機により掘り下げ、遺構検出にあたった。その後、順次遺構の掘削を行った。調査前の旧地形測量は、四電エンジニアリング株式会社が作成した測量図面を補正して使用した。調査時の測量は、平板測量による1/40図化を基本としたが、墓壙平面図および土層図等は適宜平板または手書きによる1/20図化を行った。

### 第2節 調査地の概要と基本層序

調査地は、雨山の南側斜面に立地し、調査前の状況は山林である。

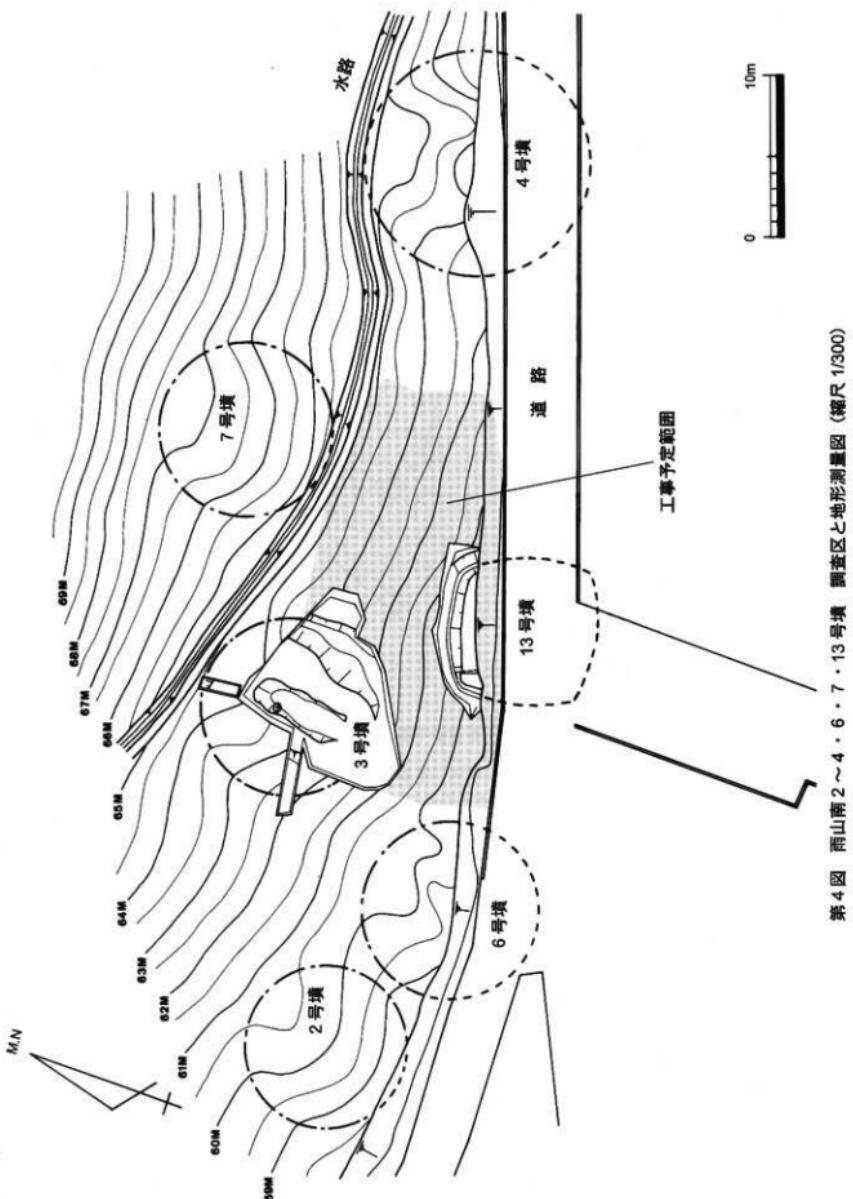
最初に3号墳の調査から開始した。調査対象は、墳丘の南東部分だが、面積的には墳丘全体の1/2近くに及んだ。調査前の標高は、北側で約64m、南側で約61mを測り、北から南へ向いて傾いている。掘削で明らかになった遺構面の標高は、北側で約63.8m、南側で約60.9mを測る。3号墳の基本土層は第6図に示したとおりだが、墳丘は次の2層によって周溝を含めた全体が覆われている。第1層は厚さ約10cmの暗褐色極細砂の表土であり、第2層は厚さ10～30cmの淡黄色極細砂である。その下に地山である灰白色粘土層（脆弱な岩盤）が存在する。第3層以下は遺構埋土で、第3層は墓壙、第4～6層は周溝の埋土である。なお、第6図は試掘調査時に作成した土層図と墓壙土層図を合成して作成したものである。そのため、南北断面と東西断面は直交していない。地山上面で検出した遺構は、墳丘、周溝、墓壙である。出土遺物は須恵器破片が3点、旧石器剥片が5点であった。

13号墳の調査は、3号墳の調査後半から併行して実施した。墳丘の大部分は、平成元年頃の道路建設工事により破壊されており、調査対象はわずかに残されていた墳丘北端部分のみである。調査前の標高は約60～61mで、掘削で明らかになった遺構面の標高は約60.5mである。調査面積は狭いが、3号墳と同様に北から南に傾く斜面に立地している。13号墳の基本土層は第10図に示したとおりだが、墳丘は次の2層によって周溝を含めた全体が覆われている。第1層は厚さ約10cmの暗褐色極細砂の表土であり、第2層は厚さ10～30cmの灰白色シルト質細砂である。その下に地山である灰白色粘土層（脆弱な岩盤）または第5層が存在する。第3・4層は周溝埋土である。地山上面で検出した遺構は、墳丘と周溝のみであり、遺物もまったく出土していない。

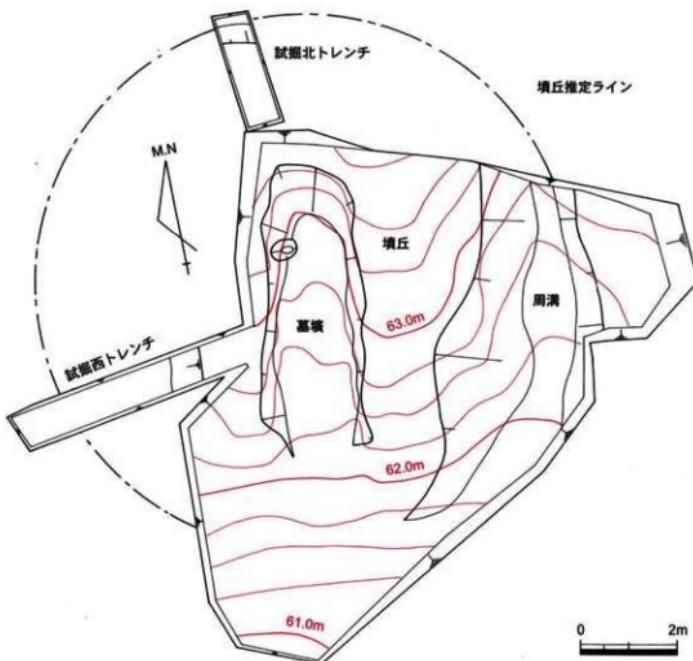
### 第3節 3号墳の調査

#### 墳丘（第5・6図）

古墳背（北側）では地山に周溝を掘削して、前面（南側）では地山を削り出して墳丘を成形している。盛土については、斜面に起因する流失または後世の盗掘により認められなかった。発掘調査では墳丘の南東部分を含めた1/2近くを検出し、試掘調査でも北トレントで墳丘と周溝を確認している。なお、試掘西トレントにおいては、搅乱もあり、墳丘と周溝の境が判然としなかった。周溝の底を墳丘端として、そして未調査部分は地形から判断すると、直徑約11mの円墳であると考えられる。墳丘の中心は、墳丘中央に掘削された墓壙の中心近くに相当し、墓壙が計画的に配置されている。墳丘前面は、墳端が判然としないが、第6図の縦断面図に表れているとおり、わずかながら段差として認められる箇所もある。墳丘は、斜面に築造されているため、背面の周溝底と前面の墳端では約2m40cmの落差をもち水平でなく、地形による影響を受けている。一方、墳丘側面の周溝底では、第6図の横断面図は斜めに墳丘を切っているため比較材料にはならないが、試掘西トレントで確認した周溝底と墓壙



第4図 雨山南2～4・6・7・13号坝 調査区之地形測量図 (縮尺 1/300)



第5図 雨山南3号墳 遺構平面図（縮尺1/100）

中軸線を挟んで反対側の周溝底を比較するとほぼ同じ標高であることから、計画的に墳丘を形成している。墳丘の高さは、背面側では約20cm、前面側では約2m50cmを測り、対角の周溝底を結んだラインから測ると約1mである。墳丘が低いのは、墳丘上部の盛土等が流失しているためと考えられるが、もともと低い墳丘であったと考えられる。

#### 周溝（第5・6図）

周溝は、墳丘前面を除き、背面を中心として側面に至るまで掘削されている。幅は墳丘の一部が崩れているため一定でないが約80cm～1m30cm、深さは20～40cmを測る。埋土は3層に分層でき、断面形状は浅いU字形を呈している。上層（第6図第4層）は、灰黄色シルト質細砂で5cm大の礫を含む。中層（第5層）は、粘質な褐灰色シルト質細砂で、長期間にわたって堆積した可能性がある。下層（第6層）は、にぶい黄色細砂で2～3cm大の礫を含んで堅い。これら3層は、周溝各所に均一にあるのではなく、第4層は墳丘東側のみ、第6層は墳丘西側に多く堆積している。

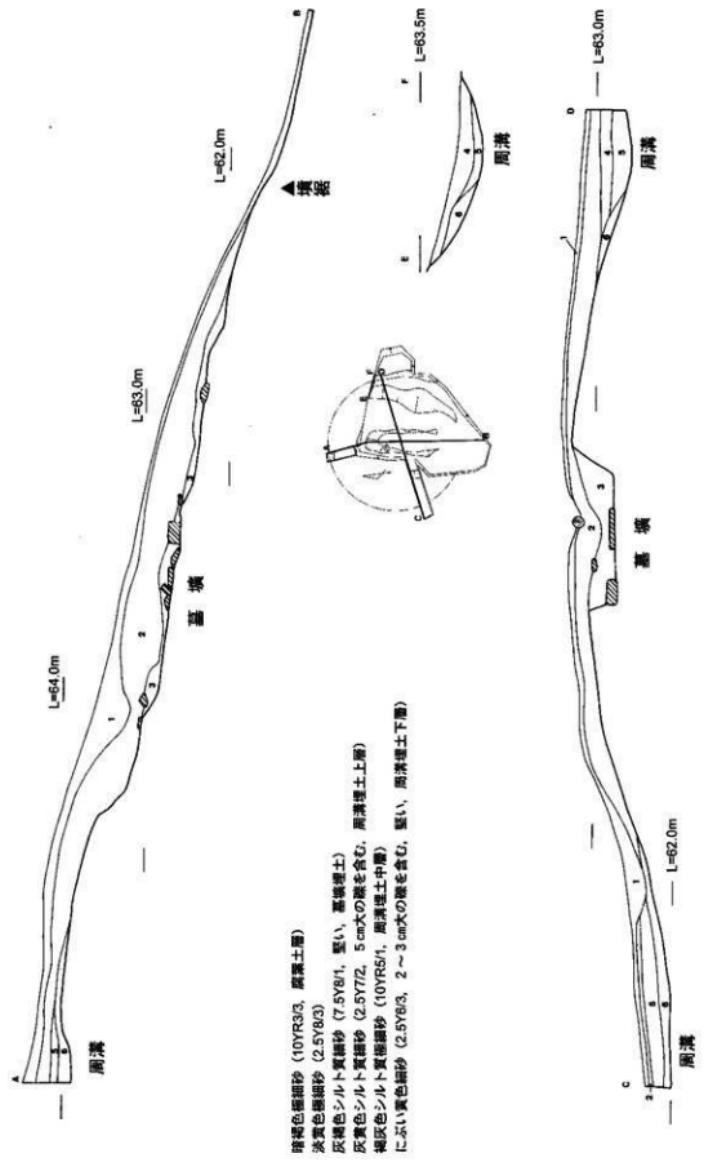
#### 墓壙（第7図）

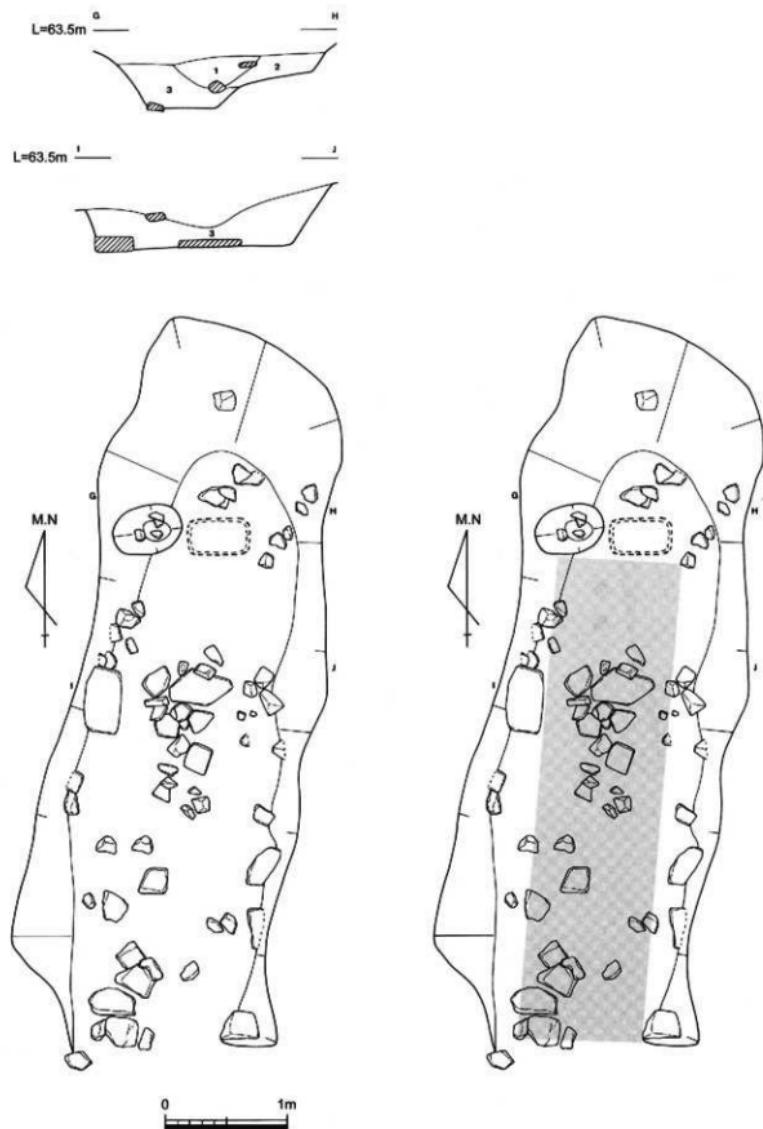
墓壙は、墳丘中央に配置されていた。平面は、長さ約6m、幅約2mを測る不整な長方形を呈する。主軸は磁北から約5度東に振っており、南向きに開口している。横断面は逆台形を呈し、深さは約50cmを測る。埋土は第3層とした堅い灰褐色シルト質細砂のみであるが、一部においては墳丘を覆う第1・2層も墓壙内に認められる。墓壙の縦断面（第6図）を見ると、底の奥壁と前端の標高差は約80cmあり、墳丘同様に地形の影響を強く受けている。

墓壙内にあったと考えられる石室は、盜掘等により石材がほとんど持ち去られていた状態であった。

0 1m

第6図 雨山南3号墳 土層図 (縮尺 1/60)





第7図 雨山南3号墳 墓壙平面・断面図（縮尺1/40）

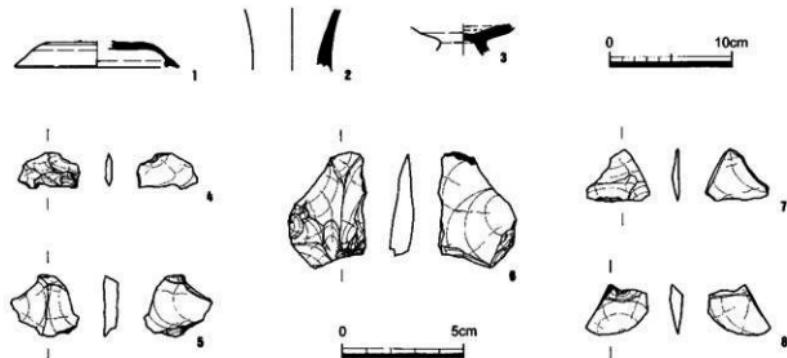
そうした状況の中で、西側面中央にある  $50 \times 30$  cm を測る長方形の石、中央の 50 cm 大の菱形の石とその周辺の石、南東端にある石は、元位置を保っている可能性が高い。西側面と南東端の石は石室側壁を、中央の菱形の石とその周辺の石は敷石を構成する石材と考えられる。また、西側面の奥側には石材を据えていた可能性が考えられる  $60 \times 40$  cm を測る穴が認められ、さらにその東隣にも穴が存在していた痕跡がある。残されていた側壁の石、石材を据えていた穴の位置から推測して、第 7 図右側の図に示すとおり、長さ 4 m 以内、幅 1 m 以内の規模をもつ石室を復元することができる。なお、ほかの石材を据えていた穴は確認できなかったことから、石材は墓壙底に直接置かれていたと考えられる。石材は、「日山石」といわれる灰白色で軟質な安山岩である。

#### 出土遺物（第 8 図）

出土遺物は、1 ~ 3 の須恵器と 4 ~ 8 の旧石器剥片である。出土位置は、1・2・7 が墓壙前面の地山直上から、3・8 が東側周溝の底（第 5 層）から、4~6 が墓壙埋土（第 3 層）からである。1・2 の須恵器については、墓壙から掘り出された可能性があるが、墓壙内に須恵器片がまったくないことから墓前祭祀に伴う可能性もある。どちらにせよ古墳の築造年代に比較的近い遺物と考えられる。

1 の須恵器杯蓋は、口縁内側に退化したかえりをもつもので、欠損しているが頂部につまみをもつ。復元口径は 13.4 cm である。2 は須恵器長頸壺の頸部片で、ラッパ状に頸部が開くものである。3 は須恵器高杯の杯部と脚部の接合部分で、おそらく短脚がつくものと考えられる。杯蓋の特徴や口径、長頸壺や高杯の特徴や組み合わせから考えて、大阪府陶邑古窯址群の編年で TK46 型式（畠山 1981）、香川県十瓶山窯跡群の編年で I ~ 2 段階（畠山 1993）に相当すると考えられる。実年代としては、7 世紀第 3 四半期頃であろう。

4 ~ 8 は旧石器剥片で、石器製作時に生じたものと考えられる。古墳に伴うものではなく、雨山南古墳群に隣接する雨山南遺跡に関連する遺物と考えられる。



第 8 図 雨山南 3 号墳 出土遺物実測図（縮尺：1 ~ 3 が 1/4, 4 ~ 8 が 1/2）

半径 1 の円は、既存縫を表す。

規番 告号	種類	大きさ(cm)			測定	色調	胎土	備考
		口径	底径	高さ				
1	須恵器 杯蓋	13.4		(2.2)	外表面：白粉ナゲ 頂部：凹削・ハケズリ 内面：白粉ナゲ	外面：BNW/ 内面：BNW/	密	
2	須恵器 長頸壺			(3.0)	外表面：白粉ナゲ 内面：白粉ナゲ	外面：BSY6/1 内面：BSY6/1	密	
3	須恵器 高杯			(2.5)	外表面：白粉ナゲ 内面：白粉ナゲ	外面：BNT/ 内面：BNT/	密	
4	旧石器 剥片	1.5	2.5	厚 0.3		サスカイト	重さ 1.3g	
5	旧石器 剥片	2.0	2.5	厚 0.6		サスカイト	重さ 3.0g	
6	旧石器 剥片	1.8	2.2	厚 0.5		サスカイト	重さ 1.2g	
7	旧石器 剥片	2.1	1.6	厚 0.3		サスカイト	重さ 1.7g	
8	旧石器 剥片	2.1	2.5	厚 0.5		サスカイト	重さ 2.1g	

第 1 表 雨山南 3 号墳 出土遺物観察表

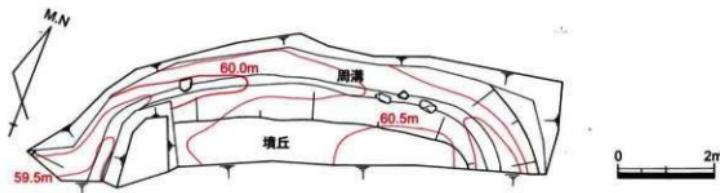
## 第4節 13号墳の調査

### 墳丘（第9図）

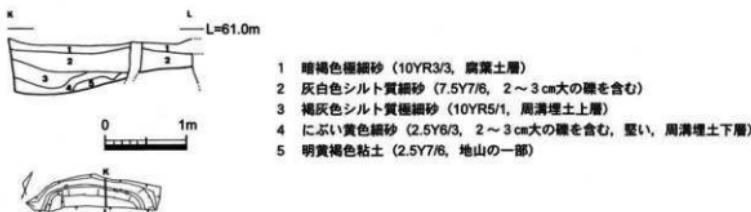
平成元年頃の道路工事によって古墳背面（北端）しか残されておらず、墳丘全体では約1/5に相当する。地山に周溝を掘削して墳丘を形成している。盛土については、斜面に起因する流失によるものか、認められなかった。検出した周溝から想定される墳形は、丸みを帯びた方形である。周溝の底を墳丘端として、四辺が対称であると仮定して復元すると、一辺約9mの丸みを帯びた方墳となる。ただし、直径10m前後の円墳を計画したが、地形の制約により背面の周溝を円形に掘削することが困難だった可能性もある。墳丘の高さは、背面で約40cm、側面で約50cm～1mしかなく、墳丘上部の盛土等が流失していると考えられるが、もともと低い墳丘であったと考えられる。

### 周溝（第9・10図）

周溝は、全てを検出したわけではないが、幅約1m40cm～2m以上を測り、深さは約40cmを測る。埋土は2層に分層でき、断面形状はU字形を呈している。上層（第10図第3層）は、粘質な褐色灰色シルト質極細砂で、長期間にわたって堆積した可能性がある。下層（第4層）は、にぶい黄色細砂で2～3cm大の礫を含んで堅い。なお、第5層の明黄褐色粘土は地山の一部である。



第9図 雨山南13号墳 造構平面図（縮尺1/100）



第10図 雨山南13号墳 周溝断面図（線尺1/60）

## 第4章まとめ

### 第1節 旧石器の評価について

今回の調査では、旧石器剥片が雨山南3号墳から出土している。これは、古墳群の西に隣接する雨山南遺跡に関連するものであろう。雨山南遺跡は、旧石器が出土する遺跡として知られており、多量の剥片とともに、瀬戸内技法の国府型ナイフ形石器が出土している（高井1993）。この遺跡の評価については、五色台周辺で採取・製作された石材を徳島方面へ搬出するルート上に形成されたものとされている（月刊歴・1992）。剥片が総重量にして5kg以上出土していることから、石材の搬入・搬出だけでなく、石器製作も盛んに行われている。雨山南遺跡の中心は、古墳群の西隣であるが、旧石器人の活動が古墳群周辺にも当然及んでいたものと考えられる。

### 第2節 雨山南3・13号墳について

雨山南3・13号墳の調査成果について、箇条書きにまとめるところとおりである。

#### 【3号墳】

- ① 直径約11mの円墳で、低い墳丘をもつ。墳丘は、地山削り出しで成形されており、背面から側面にかけて周溝がめぐっている。
- ② 墳丘中央に、南向きの墓壙が掘削されている。石室石材はほとんど抜き取られているが、小型の横穴式石室または小石室を主体部にしていると考えられる。
- ③ 墓壙前面や周溝から出土した須恵器より、7世紀後半期頃の築造年代が推測される。

#### 【13号墳】

- ① 一辺約9mの丸みを帯びた方墳の可能性があり、低い墳丘をもつ。墳丘は、地山削り出しで成形されており、背面には周溝がめぐっている。
- ② 墳丘の大部分が失われ、墓壙や出土遺物もないが、3号墳と同じ墳のものと考えられる。

以上のような特徴や、古墳群が少なくとも斜面に13基以上で構成されていることから、雨山南古墳群は、いわゆる「終末期の群集墳」に相当すると考えられる。

### 第3節 雨山南古墳群について

今回調査を実施した雨山南古墳群は、現状で13基の古墳から形成されており、終末期の群集墳に相当する。本節では、古墳群を詳細に観察することにより、その解明に努めるものである。

雨山南古墳群の分布状況を示したのが第11図であり、1号墳がやや離れて一番西に立地し、2～13号墳が密集していることが分かる。第3表は古墳群を一覧表にしたものであり、1号墳が直径19mと最大で、次いで直径15mの11号墳、14mの4号墳、12mの10号墳と続く。これら大型の4基は、墳丘背面に掘削される周溝も深く掘削されており明確に認められるが、他のものは周溝の掘削が浅いため明確ではない。墳形は、表面観察をする限りは円墳がほとんどで、今回調査した13号墳のように丸みを帯びた方墳も認められる（注1）。主体部が明らかになっている古墳は、1・3・4号墳である。1号墳は玄室の天井石が落石した横穴式石室が見られ、4号墳は道路崖面に玄室が横断に半裁された横穴式石室が露呈している。3号墳は、報告のとおり、小型の横穴式石室または小石室である。出土遺物は、1・3・5号墳で知られている。3号墳は、今回の報告のとおり、TK46型式で7世紀後半期頃のものである。1・5号墳については、若干の遺物が表採されており、ここでは、両古墳について少し詳細に報告する。

1号墳は、横穴式石室内の大部分が土砂によって埋没しているが、玄室天井石が落石しているため、ある程度の観察が可能である。石室は雨山周辺で採取できる安山岩の塊石を石材として使用しており、



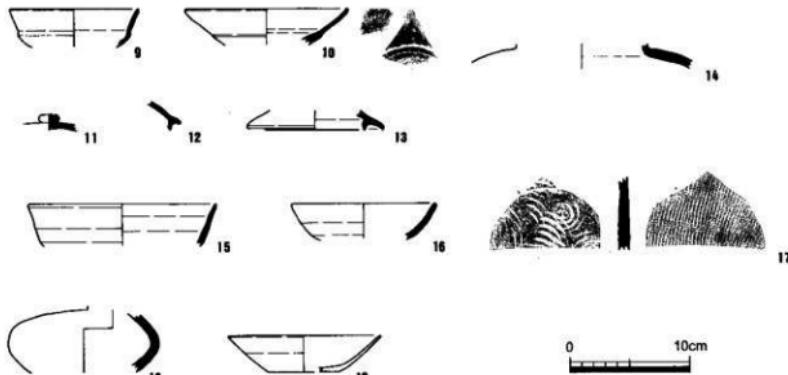
1 雨山南1号墳	2 雨山南2号墳	3 雨山南3号墳	4 雨山南4号墳	5 雨山南5号墳
6 雨山南6号墳	7 雨山南7号墳	8 雨山南8号墳	9 雨山南9号墳	10 雨山南10号墳
11 雨山南11号墳	12 雨山南12号墳	13 雨山南13号墳	14 北山1号墳	15 北山2号墳
16 北山3号墳	17 住蓮寺池1号墳	18 住蓮寺池2号墳		

第11図 雨山南古墳群および周辺の古墳群 分布図（縮尺 1/3,000）

玄室の規模は、長さ3.1m以上、幅1.4m以上を測り、比較的小型化が進んだものである。葬道は完全に埋もれているが、西方向に出入口を向いている。墳丘南側の一部が道路工事により削られ、この周辺から須恵器が表探されている。第12図9・10は墳丘から表探されたものである。9は高杯の杯部で、短い脚部がつくものである。10はハソウの可能性がある口縁部の破片で、波状文が外面に施されている。11～17は1号墳周辺で表探されたものである。11・12は杯蓋で、11には頂部の摘みが、12には比較的長いかえりが付く。13は蓋の蓋で、かえりが付く。14は短頸壺と考えられる。15は杯の口縁部である。16は高杯の杯部で、短い脚部がつくものである。17は、横瓶の体部側面で、成形時に体部に蓋をする部分である。これら須恵器を概観すると、15の新しい様相を示す杯を除けば、おむね大阪府陶邑古窯址群の編年でTK217型式に相当すると考えられる。

5号墳は、道路工事により完全に消滅した古墳で、板状の塊石が並んでいたことから、石室の可能性がある。周辺から須恵器と土師質土器が表探されている。第12図18は須恵器平瓶の体部片で、非常に小型化しており、3号墳に近い時期のものと考えられる。19は土師質土器の杯で、13～14世紀のものであることから、古墳が盗掘または再利用された時のものであろう。

以上、雨山南古墳群について報告してきたが、若干の考察を行いたい。一般的に群集墳の場合、規模の大きい古墳が最初に築造され、次第に規模が縮小していく傾向がある。実際、直径約19mの1号墳がTK217型式相当期である可能性が高いのに対し、直径約11mの3号墳はTK46形式相当期であり、1号墳より新しい。



第12図 雨山南1・5号墳出土遺物実測図(縮尺1/4)

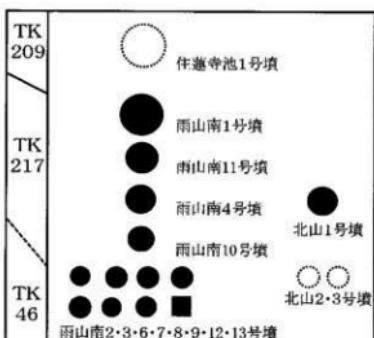
番 号	器 種	直 径(cm)			高 さ	色 調	地 上	備 考
		豆盤	杯底	縁				
9	須恵器 高杯	10.5	(3.0)	外面口縁部:波動ナメ 内面:山野模:波動ナメ	外底:褐色灰55/3/1 内底:褐色灰61/6/1	青		
10	須恵器 はそう	13.6	(3.0)	外面口縁部:波動ナメ 内面:山野模:波動ナメ	外底:褐色灰55/3/1 内底:褐色灰61/6/1	青	口縁部外面:波状文	
11	須恵器 高杯		(1.1)	外面:波動ナメ	外底:褐色灰3/8/1 内底:褐色灰3/8/2	青		
12	須恵器 高杯		(2.4)	外面口縁部:波動ナメ 内面口縁部:波動ナメ	外底:褐色灰7/1 内底:褐色灰7/1	青		
13	須恵器 高蓋	11.2	(1.6)	外面口縁部:波動ナメ 内面:山野模:波動ナメ	外底:褐色灰6/1 内底:褐色灰6/1	青		
14	須恵器 高蓋		(2.1)	外面杯底:内面ナメ	外底:褐色灰7/1 内底:褐色灰7/1	青	やや翫	
15	須恵器 杯	15.6	(3.5)	外面口縁部:波動ナメ 内面:山野模:波動ナメ	外底:褐色灰3/3/1 内底:褐色灰3/3/2	青		
16	須恵器 高杯	12.0	(3.0)	外面口縁部:波動ナメ 内面口縁部:波動ナメ	外底:褐色灰4/4/1 内底:褐色灰4/4/2	青		
17	須恵器 瓶底		(6.0)	外面底部:平行線の印字模 内面底部:河内川文の当て具底	外底:褐色灰2.5%W/1 内底:褐色灰N/T	青		
18	須恵器 瓶底	最大径 8.5	(5.2)	外面底部:凹長孔 内面底部:波動ナメ	外底:褐色灰N/T 内底:褐色灰N/T	青		
19	土師質土器 杯	12.7	5.8	外面口縁部:波動ナメ 内面口縁部:波動ナメ	外底:褐色灰10/97/4 内底:褐色灰10/97/4	青	1mm以下の右美・美石 を含む	

第2表 雨山南1・5号墳出土遺物観察表

番号	墳形	規模(m)	主体部	出土遺物	状態	備考
1	円墳	19	横穴式石室	須恵器	一部欠損	横穴式石室が天井石を欠損して露山
2	円墳	10	不明		一部欠損	
3	円墳	11	横穴式石室or小石室	須恵器、旧石器剥片	ほぼ完存	記録保存措置後は半壊
4	円墳	14	横穴式石室		半壊	横穴式石室が屋面に露出
5	円墳	不明		須恵器、土師質土器	全壊	
6	円墳	10	不明		ほぼ全壊	
7	円墳	11	不明		ほぼ完存	
8	円墳	10	不明		ほぼ完存	石材露出
9	円墳	8	不明		ほぼ完存	
10	円墳	12	横穴式石室(?)		ほぼ完存	空洞孔あり
11	円墳	15	横穴式石室(?)		ほぼ完存	空洞孔あり
12	円墳	10	不明		ほぼ完存	
13	方墳	9	不明		ほぼ全壊	記録保存措置後は全壊

※状態がほぼ完存であっても、盗掘を受けている可能性は高い。

第3表 雨山南古墳群一覧表



第13図 雨山南古墳群変遷図(案)

といった直径10m前後の古墳と、2・9・13号墳といった10m以下の規模をもつ古墳とに分けられるが、規模の差が小さいため前後関係は不明であり、築造時期の差も少ないと考えられる。おそらく3号墳が示すTK46形式相当期を最後にして古墳の築造が終了したと考えられる。

#### 第4節 雨山南古墳群と周辺の古墳群について

雨山南古墳群周辺には幾つかの古墳群が分布しており、これら古墳群との関係について言及する。

##### 【北山古墳群】

北山古墳群は、雨山南11号墳より北東へ約50m離れた位置に所在する(第11図)。雨山と日山に挟まれた鞍部(切り通し)の南東向き斜面に立地し、標高は雨山南古墳群と同じである。現状では3基が確認されるのみで、残った3基も道路工事により墳丘を大きく破壊されている。3基はほぼ南北に並んでおり、北から1号墳・3号墳・2号墳と呼称されている。このうち1号墳が最大で、直径約14mを測る円墳である。2・3号墳は、正確な規模は不明だが、直径8~10mの円墳と考えられる。墳丘は高くなく、周溝がめぐっている。道路工事によって生じた崖面より、第14図20の小型化した須恵器平瓶口縁部が表採されており、雨山南古墳群と同じ時期のものと考えられる。

以上のように、北山古墳群は、雨山南古墳群と同じ斜面に近接しており、規模や墳丘・周溝の状況が似ており、表採されている須恵器の年代も同じ頃であることから、雨山南古墳群と密接な関係が想定できる。北山1号墳は墳丘規模が雨山南4号墳に近いこと、北山2・3号墳は雨山南古墳群のうち小型のグループと規模が近いと想定されることから、第13図のとおり雨山南古墳群と同じ造墓期間

を有していると考えられる。さらに、雨山南1号墳より規模が小さいことを考慮すると、北山古墳群は雨山南古墳群から派生した一支群と捉えることが可能である。



第14図 北山古墳群出土遺物実測図(縮尺1/4)

第4表 北山古墳群出土遺物観察表						
番号	種類	形状(cm)	大きさ	色調	土質	備考
20	須恵器 平底	3.5 (4.0)	外径16.5cm 内径14.5cm 厚さ4.0cm	赤褐色 外側:褐色 内側:褐色	砂質 粘土質	

#### 【住蓮寺池古墳群】

住蓮寺池古墳群は、雨山南1号墳より西へ190m離れた位置(第11図)にあり、1・2号墳の2基から構成される。現状は1号墳が住蓮寺池の池底に、2号墳が池端に所在するが、この池は後世に造られた溜池であり、古墳築造当初は南から北へ派生する尾根上に立地していたものと考えられる。

住蓮寺池1号墳は、池の浚渫工事等によって破壊されており、埴輪の規模や主体部は不明だが、石室石材が散乱している箇所から須恵器が表採されている。第15図21~24は杯蓋で、復元口径が10.4~15cmまで見られ、23の外面には回転ヘラケズリ調整が残る。25・26は杯で、復元口径が10.8cmと12cmで、口縁部のかえりが退化しているが、25の外面には回転ヘラケズリ調整が残る。27は有蓋高杯の杯部である。28は高杯の脚部で長脚2段透かしのものである。29も高杯の脚部で短脚のものである。30は盃の蓋、31は短頭盃の口縁部、32も盃の口縁部、33・34は盃の体部である。これら須恵器は、主に2時期に分けられる。杯蓋のうち大型のものや、長脚2段透かしの高杯が古相を示しTK209型式と考えられる。一方、杯蓋のうち小型のものや杯、短脚の高杯が新相を示しTK217型式に相当すると考えられる。一般的に、TK209~217型式相当期は横穴式石室が主流であり、表採ながら多くの須恵器が出土していることを考慮すると、それなりの規模をもった横穴式石室であった可能性が指摘できる。本古墳群より東南東へ約1kmはなれたところには、大型の横穴式石室をもつ矢野面古墳が存在し、石室構造よりTK209型式より古いことから、当地にはすでに横穴式石室が導入されていたことの傍証となろう。住蓮寺池1号墳が横穴式石室墳であった場合、表採された須恵器のうちTK209型式相当のものが初葬時、TK217型式相当のものが追葬時のものと想定できる。いずれにせよ第13図のとおり、住蓮寺池1号墳が雨山南古墳群より先行する古墳として位置づけられよう。

住蓮寺池2号墳は、古墳状隆起が認められるのみである。35の須恵器蓋の体部片が表採されている。なお、古墳時代のものではないが、36の高台を付けた須恵器蓋の底部片が、住蓮寺池北岸の雨山寄りで表採されている。

以上、雨山南古墳群および周辺の古墳群について検討した結果、変遷と内容が明らかになってきた。発掘調査は面積的に限られたものであったが、この地域における古墳の動態について、わずかながらも解明できたと考えられる。さらに視野を広げて、雨山南古墳群のように小規模な古墳が密集している例を高松平野全体で探した場合、岡山古墳群、平尾古墳群、淨願寺山古墳群などが知られている。これら古墳群も、雨山南古墳群同様に終末期の群集墳である可能性は高い。今後は、これら終末期の群集墳について発掘調査や研究が進めば、古墳時代終焉における葬制や造墓活動だけでなく社会の背景も解明されるであろう。

#### 《注》

1) 香川県内における7世紀代の方墳の例としては、大野原町角塚古墳、豊浜町雲岡古墳などが挙げられる。

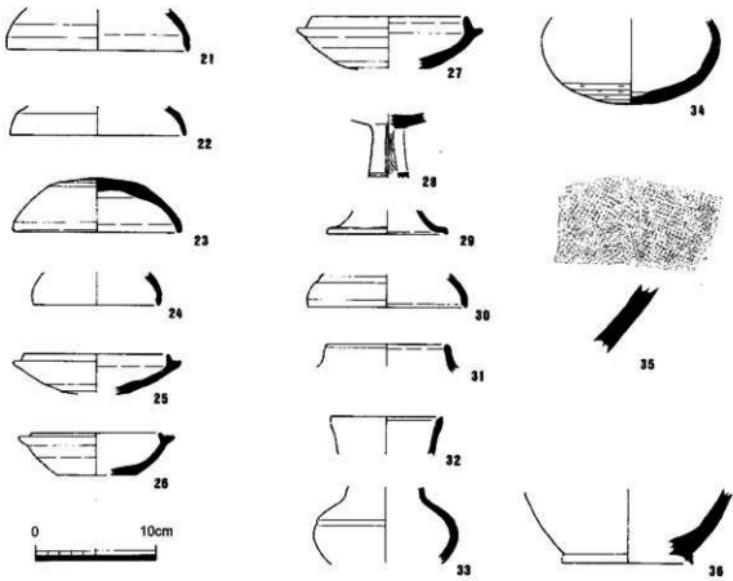
#### 《参考文献》

佐藤竜馬 1993 「香川県十瓶山窓跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論叢』

田辺昭二 1981 「須恵器大成」角川書店

丹羽佑一 1992 「高松平野の歴史的構造 1原始」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会

藤井雄三 1983 「高松市雨山南遺跡発見の国府型ナイフ形石器」『香川考古』創刊号 香川考古刊行会



第15図 住蓮寺池古墳群 出土遺物実測図 (縮尺1/4)

番 号	器 種	実量(cm)			調 査	色 調	胎 上	備 考
		上径	底径	高さ				
21	須恵器 水差	15.0		(3.4)	外面部縁部: 回転ナメ 内面部縁部: 回転ナメ	外面: 黒V8/ 内面: 黒V8/	新	
22	須恵器 杯	14.5		(2.4)	外面部縁部: 回転ナメ 内面部縁部: 回転ナメ	外表面: 青黄灰2.5VS5-2 内表面: 白灰V8/	やや粗	
23	須恵器 杯	13.5		4.5	外面部縁部: 回転ナメ 内面部縁部: 回転ナメ	外面: 黑C17/ 内面: 灰白N7/	やや粗	
24	須恵器 杯	10.4		(2.7)	外面部縁部: 回転ナメ 内面部縁部: 回転ナメ	外面: 黑E17N7/ 内面: 白灰N7/	新	
25	須恵器 杯	12.0	5.9	3.3	外面部縁部: 回転ナメ 内面部縁部: 回転ナメ	外表面: 黑VS5/1 内表面: 灰VS5/1	やや粗	
26	須恵器 片	10.8	5.5	3.5	外面部縁部: 回転ナメ 内面部縁部: 回転ナメ	外面: 黑灰E15V6/1 内面: 黑E12.5Y7/1	やや粗	
27	須恵器 高足	12.5		(4.3)	外面部縁部: 回転ナメ 内面部縁部: 回転ナメ	外面: 青灰E19V8/1 内面: 黑灰E19V8/1	やや粗	
28	須恵器 高足			(5.3)	外面部縁部: 回転ナメ 内面部縁部: 回転ナメ	外表面: 黑E17/1 内表面: 黑E17/1	新	脚跡: 3方向から透かし穴 脚跡外側: 開縫1条
29	須恵器 高足			(2.0)	外面部縁部: 回転ナメ 内面部縁部: 回転ナメ	外表面: 黑E19V8/1 内面: 黑灰E19V8/1	新	
30	須恵器 高足			(2.8)	外面部縁部: 回転ナメ 内面部縁部: 回転ナメ	外表面: 黑E5/1 内面: 黑E5/5	新	
31	須恵器 研究用			(2.3)	外面部縁部: 回転ナメ 内面部縁部: 回転ナメ	外表面: 淡灰E19V6/1 内面: 黑E19V6/1	新	
32	須恵器 研究用			(3.2)	外面部縁部: 回転ナメ 内面部縁部: 回転ナメ	外表面: 黑E19V7/1 内面: 淡灰E19V7/1	やや粗	
33	須恵器 片			(6.3)	外面部縁部: 休窓、回転ナメ 内面部縁部: 休窓、回転ナメ	外表面: 灰E17/1 内面: 灰E17/1	やや粗	鉢形外側: 凹溝1条
34	須恵器 水差			(7.2)	外面部縁部: 休窓ナメ 底部: 回転ナメ 内面部縁部: 休窓ナメ	外表面: 増ナメツアメE5CV4/1 内面: 増ナメツアメE5CV4/1	やや粗	
35	須恵器 片			(5.4)	外面部縁部: 休窓、内面の凹凸 内面部縁部: 休窓、内面の凹凸	外表面: 淡灰E19V6/1 内面: 淡灰E19V6/1	新	
36	須恵器 片			(6.2)	外面部縁部: 休窓、回転ナメ 内面部縁部: 休窓、回転ナメ	外表面: 淡灰E19V6/1 内面: 淡灰E19V6/1	新	

第15表 住蓮寺池古墳群 出土遺物観察表



写真1 調査地遠景（南から）



写真2 調査地近景（南西から）



写真3 調査地および日妻山（北から）



写真4 3号墳調査地全景（北西から）



写真5 3号墳東側周溝全景（南から）



写真6 3号墳東側周溝断面（南から）

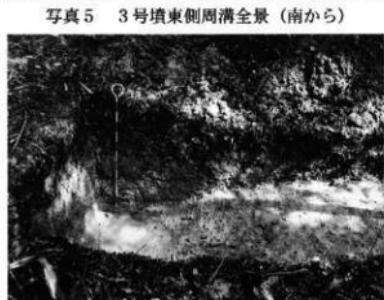


写真7 3号墳北側周溝断面（試掘、西から）



写真8 3号墳墓壙南北断面（西から）

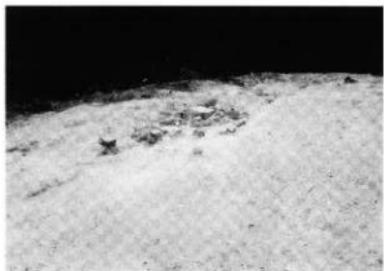


写真9 3号墳墓壇と墳丘（南東から）



写真10 3号墳墓壇全景（北から）



写真11 3号墳墓壇内の石材検出状況（西から）



写真12 3号墳墓壇完掘状況（南から）



写真13 13号墳全景（東から）



写真14 13号墳東側周溝断面（南から）



写真15 13号墳周溝断面（西から）



写真16 1号墳横穴式石室（西から）

## 報 告 書 抄 錄

## 雨山南古墳群

～3・13号墳～

— 電気通信事業用無線丘陵地帯建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成 17 年 8 月 31 日

編 集 高松市教育委員会  
高松市番町一丁目 8 番 15 号  
発 行 高松市教育委員会  
四電エンジニアリング株式会社  
印 刷 有限会社 中央ファイリング